茅盾全集

第五卷

岩波書店

昭和三十八年一月四日印刷
昭和三十八年一月八日發行

荷風全集第五卷
定價六百圓

著者　永井壯吉
發行者　岩波雄二郎
發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 第二回配本　精興社印刷　牧製本

目　次

すみだ川……一
第五版すみだ川之序……六一
すみだ川序……六三
つくりばなし……六六
新橋夜話……七三
序……七五
掛取り……七七
色男……九三
風邪ごゝち……一一九
名花……一三九
松葉巴……一五七
五月闇……一七五

淺瀬……一八九
短夜……二〇一
晝すぎ……二一三
見果てぬ夢……二二七
小品集……二五三
夏の町……二五五
傳通院……二七三
下谷の家……二八五
樂器……二九九
日本の庭……三〇九
父の恩……三二三
後記……三七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

すみだ川

一

俳諧師松風庵蘿月は今戸で常磐津の師匠をしてゐる實の妹をば今年は盂蘭盆にもたづねずにしまつたので毎日その事のみ氣にしてゐる。然し日盛りの暑さにはさすがに家を出かねて夕方になるのを待つ。夕方になると竹垣に朝顔のからんだ勝手口で行水をつかつた後其のまゝ眞裸體で晩酌を傾けやつとの事膳を離れると、夏の黄昏も家々で焚く蚊遣の烟と共にいつか夜となり、盆栽を竝べた窓の外の往來には簾越しに下駄の音職人の鼻唄人の話聲がにぎやかに聞え出す。蘿月は女房のお瀧に注意されてすぐにも今戸へ行くつもりで格子戸を出るのであるが、其邊の涼臺から聲をかけられるがまゝ腰を下すと、一杯機嫌の話好に、毎晩きまつて埒もなく話し込んでしまふのであつた。

朝夕がいくらか涼しく樂になつたかと思ふと共に大變日が短くなつて來た。朝顔の花が日毎に小さくなり、西日が燃える焰のやうに狹い家中へ差込んで來る時分になると鳴きしきる蟬の聲が一際耳立つて急しく聞える。八月もいつか半過ぎてしまつたのである。家の後の玉蜀黍の畠に吹き渡る

風の響が夜なぞは折々雨かと誤たれた。蘿月は若い時分したい放題身を持崩した道樂の名殘とて時候の變目といへば今だに骨の節々が痛むので、いつも人より先に秋の立つのを知るのである。秋になつたと思ふと唯わけもなく氣がせはしくなる。

蘿月は俄に狼狽へ出し、八日頃の夕月がまだ眞白く夕燒の空にかゝつてゐる頃から小梅瓦町の住居を後にテク〳〵今戸をさして歩いて行つた。

堀割づたひに曳舟通から直ぐさま左へまがると、土地のものでなければ行先の分らないほど迂回した小徑が三圍稻荷の横手を巡つて土手へと通じてゐる。小徑に沿うては田圃を埋立てた空地に、新しい貸長屋がまだ空家のまゝに立並んだ處もある。廣々した構への外には大きな庭石を据並べた植木屋もあれば、いかにも田舍らしい茅葺の人家のまばらに立ちつゞいてゐる處もある。それ等の家の竹垣の間からは夕月に行水をつかつてゐる女の姿の見える事もあつた。蘿月宗匠はいくら年をとつても昔の氣質は變らないので見て見ぬやうに窃と立止るが、大概はぞつとしない女房ばかりなので、落膽したやうに其のまゝ歩調を早める。そして賣地や貸家の札を見て過る度々、何ともつかず其の胸算用をしながら自分も懷手で大儲がして見たいと思ふ。然しまた田圃づたひに歩いて行く中水田のところ〴〵に蓮の花の見事に咲き亂れたさまを眺め青々した稻の葉に夕風のそよぐ響をきけば、さすがは宗匠だけに、錢勘定の事よりも記憶に散在してゐる古人の句をば實に巧いものだと

思返すのであつた。

土手へ上つた時には葉櫻のかげは早や小暗く水を隔てた人家には灯が見えた。吹きはらふ河風に櫻の病葉がはら〳〵散る。蘿月は休まず歩きつゞけた暑さにほつと息をつき、ひろげた胸をば扇子であふいだが、まだ店をしまはずにゐる休茶屋を見付けて慌忙て立寄り、「おかみさん、冷で一杯。」と腰を下した。正面に待乳山を見渡す隅田川には夕風を孕んだ帆かけ船が頻りに動いて行く。水の面の黄昏れるにつれて鷗の羽の色が際立つて白く見える。宗匠は此の景色を見ると時候はちがふけれど酒なくて何の己れが櫻かなと急に一杯傾けたくなつたのである。

休茶屋の女房が縁の厚い底の上つたコツプについで出す冷酒を、蘿月はぐいと飲干して其のまゝ竹屋の渡船に乗つた。丁度河の中程へ來た頃から舟のゆれるにつれて冷酒がおひ〳〵にきいて來る。葉櫻の上に輝きそめた夕月の光がいかにも涼しい。滑な滿潮の水は「お前どこ行く」と流行唄にもあるやうにいかにも投遣つた風に心持よく流れてゐる。宗匠は目をつぶつて獨で鼻唄をうたつた。

向河岸へつくと急に思出して近所の菓子屋を探して土産を買ひ今戸橋を渡つて眞直な道をば自分ばかりは足許のたしかなつもりで、實は大分ふら〳〵しながら歩いて行つた。

そこ此處に二三軒今戸燒を賣る店にわづかな特徴を見るばかり、何處の場末にもよくあるやうな

低い人家つゞきの横町である。人家の軒下や路地口には話しながら涼んでゐる人の浴衣が薄暗い軒燈の光に際立つて白く見えながら、あたりは一體にひつそりして何處かで犬の吠える聲と赤兒のなく聲が聞える。天の川の澄渡つた空に繁つた木立を聳かしてゐる今戸八幡の前まで來ると、蘿月は間もなく並んだ軒燈の間に常磐津文字豐と勘亭流で書いた妹の家の灯を認めた。家の前の往來には人が二三人も立止つて內なる稽古の淨瑠璃を聞いてゐた。

折々恐しい音して鼠の走る天井からホヤの雲つた六分心のランプがところ〴〵寶丹の廣告や都新聞の新年附錄の美人畫なぞで破れ目をかくした襖を始め、飴色に古びた箪笥、雨漏のあとのある古びた壁なぞ、八疊の座敷一體をいかにも薄暗く照してゐる。古ぼけた葭戸を立てた緣側の外には小庭があるのやら無いのやら分らぬほどな闇の中に軒の風鈴が淋しく鳴り蟲が靜に鳴いてゐる。師匠のお豐は緣日ものゝ植木鉢を竝べ、不動尊の掛物をかけた床の間を後にしてべつたり坐つた膝の上に三味線をかゝへ、樫の撥で時々前髪のあたりをかきながら、掛聲をかけては彈くと、稽古本を廣げた桐の小机を中にして此方には三十前後の商人らしい男が中音で、「そりや何を云はしやんす、今さら兄よ妹と云ふに云はれぬ戀中は……。」と「小稻半兵衞」の道行を語る。

蘿月は稽古のすむまで緣近くに坐つて、扇子をぱちくりさせながら、まだ冷酒のすつかり醒めき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

らぬ處から、時々は我知らず口の中で稽古の男と一しよに唄つたが、時々は目をつぶつて遠慮なく噯をした後、身體を輕く左右にゆすりながらお豐の顏をば何の氣もなく眺めた。お豐はもう四十以上であらう。薄暗い釣ランプの光が痩せこけた小作りの身體をば猶更に老けて見せるので、ふいと此れが昔は立派な質屋の可愛らしい箱入娘だつたのかと思ふと、蘿月は悲しいとか淋しいとか然う云ふ現實の感慨を通過して、唯だ〳〵不思議な氣がしてならない。其の頃は自分も矢張若くて美しくて、女にすかれて、道樂して、とう〳〵實家を七生まで勘當されてしまつたが、今になつては其の頃の事はどうしても事實ではなくて夢としか思はれない。算盤で乃公の頭をなぐつた親爺にしろ、泣いて意見をした白鼠の番頭にしろ、暖簾を分けて貰つたお豐の亭主にしろ、さう云ふ人達は怒つたり笑つたり泣いたり喜んだりして、汗をたらして飽きずによく働いてゐたものだが、一人々々皆死んでしまつた今日となつて見れば、あの人達はこの世の中に生れて來ても來なくてもつまる處は同じやうなものだつた。まだしも自分とお豐の生きてゐる間は、あの人達は兩人の記憶の中に殘されてゐるものゝ、やがて自分達も死んでしまへばいよ〳〵何も彼も煙になつて跡方もなく消え失せてしまふのだ……。

「兄さん、實は二三日中に私の方からお邪魔に上らうと思つてゐたんだよ。」とお豐が突然話しだした。

稽古の男は小稲半兵衛をさらつた後同じやうなお妻八郎兵衛の語出しを二三度繰返して歸つて行つたのである。蘿月は尤もらしく坐り直して扇子で輕く膝を叩いた。

「實はね。」とお豐は同じ言葉を繰返して、「駒込のお寺が市區改正で取拂ひになるんだとさ。それでね、死んだお父つアんのお墓を谷中か染井か何處かへ移さなくつちやならないんだつてね、四五日前にお寺からお使が來たから、どうしたものかと、其の相談に行かうと思つてたのさ。」

「成程。」と蘿月は頷付いて、「さういふ事なら打捨つても置けまい。もう何年になるかな、親爺が死んでから……。」

首を傾げて考へたが、お豐の方は着々話しを進めて染井の墓地の地代が一坪いくら、寺への心付けが何うのかうのと、それについては女の身よりも男の蘿月に萬事を引受けて取計らつて貰ひたいと云ふのであつた。

蘿月はもと小石川表町の相模屋と云ふ質屋の後取息子であつたが勘當の末若隱居の身となつた。頑固な父が世を去つてからは妹お豐を妻にした店の番頭が正直に相模屋の商賣をつゞけてゐた。處が御維新此の方時勢の變遷で次第に家運の傾いて來た折も折火事にあつて質屋はそれなり潰れてしまつた。で、風流三味の蘿月は已むを得ず俳諧で世を渡るやうになり、お豐は其の後亭主に死別れた不幸つゞきに昔名を取つた遊藝を幸ひ常磐津の師匠で生計を立てるやうになつた。お豐には今年

十八になる男の子が一人ある。零落した女親がこの世の樂しみと云ふのは全く此の一人息子長吉の出世を見やうと云ふ事ばかりで、商人はいつ失敗するか分らないと云ふ經驗から、お豐は三度の飯を二度にしても、行く〳〵はわが兒を大學校に入れて立派な月給取りにせねばならぬと思つて居る。

蘿月宗匠は冷えた茶を飲干しながら、「長吉はどうしました。」

するとお豐はもう得意らしく、「學校は今夏休みですがね、遊ばしといちやいけないと思つて本郷まで夜學にやります。」

「ぢや歸りは晩いね。」

「えゝ。いつでも十時過ぎますよ。電車はありますがね、隨分遠路ですからね。」

「吾輩とは違つて今時の若いものは感心だね。」宗匠は言葉を切つて、「中學校だつけね、乃公は子供を持つた事がねえから當節の學校の事はちつとも分らない。大學校まで行くにやまだ餘程かゝるのかい。」

「來年卒業してから試驗を受けるんでさアね。大學校へ行く前に、もう一ツ……大きな學校があるんです。」お豐は何も彼も一口に說明してやりたいと心ばかりは急つても、矢張り時勢に疎い女の事で忽ち云淀んでしまつた。

「たいした經費だらうね。」
「え丶其ア、大抵ぢや有りませんよ。何しろ、あなた、月謝ばかりが毎月一圓、本代だつて試驗の度々に二三圓ぢやきゝませんしね、其れに夏冬ともに洋服を着るんでせう、靴だつて年に二足は穿いてしまひますよ。」
お豐は調子づいて苦心の程を一倍强く見せやうためか聲に力を入れて話したが、蘿月はその時、其れ程にまで無理をするなら、何も大學校へ入れないでも、長吉にはもつと身分相應な立身の途がありさうなものだといふ氣がした。しかし口へ出して云ふほどの事でもないので、何か話題の變化をと望む矢先へ、自然に思ひ出されたのは長吉が子供の時分の遊び友達でお糸と云つた煎餅屋の娘の事である。蘿月は其の頃お豐の家を訪ねた時にはきまつて甥の長吉とお糸をつれては奥山や佐竹ツ原の見世物を見に行つたのだ。
「長吉が十八ぢや、あの娘はもう立派な姉さんだらう。矢張稽古に來るかい。」
「家へは來ませんがね、この先の杵屋さんにや毎日通つてますよ。もう直き葭町へ出るんだつて云ひますがね……。」とお豐は何か考へるらしく語を切つた。
「葭町へ出るのか。そいつア豪儀だ。子供の時からちよいと口のきゝやうのませた、好い娘だつたよ。今夜にでも遊びに來りやアいゝに。ねえ、お豐。」と宗匠は急に元氣づいたが、お豐はポンと

長煙管をはたいて、

「以前とちがつて、長吉も今が勉強ざかりだしね……。」

「はゝゝは。間違ひでもあつちやならないと云ふのかね。尤もだよ。この道ばかりは全く油斷がならないからな。」

「ほんとさ。お前さん。」お豐は首を長く延して、「私の僻目かも知れないが、實はどうも長吉の様子が心配でならないのさ。」

「だから、云はない事ツちやない。」と蘿月は輕く握り拳で膝頭をたゝいた。お豐は長吉とお糸のことが唯何となしに心配でならない。と云ふのは、お糸が長唄の稽古歸りに毎朝用もないのに屹度立寄つて見る、其れをば長吉は必ず待つてゐる様子で其の時間頃には一足だつて窓の傍を去らない。其れのみならず、いつぞやお糸が病氣で十日程も寢てゐた時には、長吉は外目も可笑しい程にぼんやりして居た事などを息もつかずに語りつゞけた。

次の間の時計が九時を打出した時突然格子戸ががらりと明いた。其の明け様でお豐はすぐに長吉の歸つて來た事を知り急に話を途切し其の方に振返りながら、

「大變早いやうだね、今夜は。」

「先生が病氣で一時間早くひけたんだ。」

「小梅の伯父さんがおいでだよ。」

返事は聞えなかつたが、次の間に包を投出す音がして、直様長吉は溫順しさうな弱さうな色の白い顏を襖の間から見せた。

二

殘暑の夕日が一しきり夏の盛よりも烈しく、ひろ〳〵した河面一帶に燃え立ち、殊更に大學の艇庫の眞白なペンキ塗の板目に反映してゐたが、忽ち燈の光の消えて行くやうにあたりは全體に薄暗く灰色に變色して來て、滿ち來る夕汐の上を滑つて行く荷船の帆のみが眞白く際立つた。と見る間もなく初秋の黃昏は幕の下るやうに早く夜に變つた。流れる水がいやに眩しくきら〳〵光り出して、渡船に乘つて居る人の形をくつきりと墨繪のやうに黑く染め出した。堤の上に長く横はる葉櫻の木立は此方の岸から望めば恐しいほど眞暗になり、一時は面白いやうに引きつゞいて動いてゐた荷船はいつの間にか一艘殘らず上流の方に消えてしまつて、釣の歸りらしい小舟がところ〴〵木の葉のやうに浮いてゐるばかり、見渡す隅田川は再びひろ〳〵としたばかりか靜に淋しくなつた。遙か川上の空のはづれに夏の名殘を示す雲の峰が立つてゐて細い稻妻が絕間なく閃めいては消える。

長吉は先刻から一人ぼんやりして、或時は今戸橋の欄干に凭れたり、或時は岸の石垣から渡場の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com